

ひととひとをつなぐ持続可能な公民館活動について

第4期国分寺市公民館運営審議会答申

令和5年6月

はじめに

国分寺市公民館運営審議会では、これまで3つの答申を提出してきた。各期のテーマは、第1期が「地域づくりを目指した公民館のあり方」、第2期が「国分寺のまちを学び共に創りだす公民館活動の今後について」、第3期が「新型コロナウイルス感染症対策下における公民館の役割」であった。

国分寺市の公民館では、これらの提言に基づき運営・事業を展開している。現在は、利用者の高齢化、市民の学習ニーズの多様化など様々な課題がある中で、幼児から高齢者まで多様な年齢層がそれぞれの自己実現を図るとともに、相互につながり学びあい、よりよい公民館活動が継承されていくことが求められている。

国分寺市公民館ではこのような活動を「持続可能な公民館活動」と呼び、「ひととひとをつなぐ持続可能な公民館活動について」を諮問事項とし、次の具体的なテーマを設定した。(1)幼児から若者の世代にとって身近に感じられる公民館の運営、(2)就労、子育て等の現役世代が気軽に集える公民館運営、(3)すべての世代が公民館を舞台につながることのできる公民館運営。

本審議会は上記の諮問に対する答申作成にあたり、「公民館と他施設・他団体との連携」「事業企画に対する市民参画」「的確な情報発信」という3つの視点を抽出し、それぞれに対応する検討グループを設置して答申内容を練り上げた。本答申が、国分寺市の公民館活動の持続可能性を高めるとともに、コミュニティの活性化と地域づくりに貢献できることを願ってやまない。

令和5（2023）年5月

第4期国分寺市公民館運営審議会

委員長 田中雅文

目 次

はじめに

本答申の要旨	3
I 公民館の現代的意義と本答申の視点	7
II 豊かな公民館活動を生み出す連携の拡充	10
III すべての世代の参画に基づく事業企画	17
IV 地域の拠点「公民館」からの情報発信	28
むすび—3つの視点に基づく施策推進の条件—	35

資料編

資料1 諮問文	39
資料2 テーマ別プレゼンまとめ	40
資料3 過去6年間に図書館・児童館と連携をした事例	46
資料4 情報発信から見た講座の成功例・失敗例	50
資料5 第4期国分寺市公民館運営審議会委員名簿	51

本答申の要旨

本答申は、Ⅰ～Ⅳ及び「むすび」から構成されている。これらの要旨を以下に整理する。詳細は、各章の具体的な記述を参照されたい。

Ⅰ 公民館の現代的意義と本答申の視点

公民館は、孤立や分断が進行するウィズ・コロナの時代にあって、人々が集い、つながり、より良い自分と地域を創っていく上で、なくてはならないものである。それは、同じ地域に住む人々が地域を愛し世代を超えたネットワークを築く中で、バラバラになっている個人をつなげ、互いに生きていくための力を与え合う場としての役割を持つものである。

本答申は、公民館のこうした現代的意義を大切にし、ひととひとをつなぐ持続可能な公民館活動を実現するため、「公民館と他施設・他団体との連携」「事業企画に対する市民参画」「的確な情報発信」という3つの視点から提案をまとめたものである。下記のⅡ～Ⅳがこれらの視点に対応した提案の骨子である。

ただし、国分寺市の公民館は、すでに特色ある事業を多様に展開している（それらは答申本文の随所に紹介している）。本答申における提案は、それらをさらに発展させるとともに新規の事業を創出するための課題として、何回にもわたる丁寧な議論から生まれたものである。

Ⅱ 豊かな公民館活動を生み出す連携の拡充

連携とは、独自の個性をもついくつかの施設や団体あるいは個人が、包括的な目的を共有しつつ、その目的達成のために共同で活動することである。ここでは、以下の連携を提案する。

(1) 公民館同士及び他の施設との連携

市内5館同士，対児童館・図書館，対市外諸施設との連携により，単独ではできない講座・事業等の企画・運営を行う。

(2) 公民館と地域の運営に関連する諸団体との連携

市民活動団体，町内会あるいは一部の社会教育団体など地域ガバナンスに関連する諸団体と連携する。「地域会議」のさらなる充実も重要である。

(3) 公民館と学校との連携

日常のコミュニケーション，学校を利用した公民館事業，学生・生徒からのアイデア募集，運営サポート会議を通じた連携，相互の資源活用を図る。

(4) 連携による情報の収集・共有と発信

市内外の施設や団体等の事業情報を公民館が一元的に収集し，広報誌，インターネット，SNSなどを通じて発信する。

III すべての世代の参画に基づく事業企画

講座をつくるためには，様々な世代やテーマに関する当事者の声を事業企画に活かしていく必要がある。そのため，市民が事業企画に参画し，職員と共に講座を企画していくための新たな仕組みを提案する。

(1) 『企画募集チラシ』で市民参画のきっかけづくり

市民が事業企画に参画できる，ということを周知するためのチラシを作成し，市内の多様な施設で配布する。

(2) 公開企画会議・企画大会の実施

公民館の利用者・未利用者のどちらでも参加できる「公開企画会議」，「企画大会」（中高生部門も特設）を行い，市民がやりたいことを持ち込める場を用意する。

(3) 図書館・児童館との事業企画

図書館・児童館と公民館が共に事業企画を行う体制づくりが必要である。とくに児童館については、子どもたちに企画を経験してもらうことも検討する。

(4) 学校との事業企画

総合的な学習の時間や職場体験を、「公民館の講座を考えてみる」といった内容で行う。逆に、「国分寺学」などの授業に公民館関係者を派遣する。

(5) 事業企画を進める上での重要なポイント

主なポイントは、次のとおりである。①実際に顔を合わせて話をする機会を持つ。②企画は公民館の外で生まれる。③それぞれの分野にいるコーディネーターにつながっていく。④事業企画する・講座主催するという経験を楽しんでもらう。⑤具体的に困っている事や課題、また講座の開催に向けて必要なことをみんなで共有していく。

※「講座をつくる」という学び方があるという考えを普及することが重要。

IV 地域の拠点「公民館」からの情報発信

公民館には様々な「きっかけ」が転がっている。この「きっかけ」を多くの市民につかんでもらうためには、まず公民館に足を運んでもらう必要がある。それには、魅力的な情報発信が不可欠である。

(1) ターゲットの明確化

講座や事業によって対象となる人やターゲットを絞って発信する。

(2) 市民と職員のコミュニケーション

魅力あるチラシ作成のために、講座参加者のアイデアを活用する。

(3) 「次に核になる人」の係わり

持続可能な公民館活動のため、後の世代に役割を引き継いでいく。

(4) ガイドブックの作成

各館の特色や講座などを載せたガイドブックを作り、配布する。

(5) 発信内容の3つの柱

公民館の魅力，発見できる魅力，繋がれるという3つの柱を有効活用する。

(6) キャッチーなワードの活用

講座の魅力を発信するため，遊び心やキャッチーなワードも活用する。

むすび—3つの視点に基づく施策推進の条件—

Ⅱ～Ⅳで述べた施策を推進することにより，子どもから高齢者まで，未利用者を含めてあらゆる世代の市民が公民館を利用する可能性が飛躍的に高まるはずである。

ただし，それには下記の条件が満たされなければならない。

第1に，職員の力量の維持・向上である。Ⅱ～Ⅳで記述したことを実現し，さらには新たな展開を促すには，効果的な研修や資質の高い職員の確保が不可欠である。

第2に，日常的なコミュニケーションの促進である。市民同士や市民と職員，あるいは公民館関係者とその他の施設・団体の関係者など，多様な人々の間でコミュニケーションが誘発される環境が必要である。

第3に，公民館と学校との関係を密にしておくことである。コミュニティ・スクール協議会などを媒介に，公民館と学校，つまり公民館職員と学校の教職員との関係を日常から丁寧に築いていくことが求められる。

以上のように，職員の力量，コミュニケーション，対学校関係といった，基礎的な条件を整えることが不可欠である。これらを高いレベルで担保し，諮問事項である持続可能な公民館活動の実現に向けて邁進してもらいたい。

I 公民館の現代的意義と本答申の視点

1 公民館の現代的意義

公民館は、「つどう・まなぶ・つながる」ための場だと言われている（文部科学省作成のパンフレット「公民館（日本語版）」（2010年）より）。コロナ禍を経験した今、私たちは、このことの大切さを痛感している。

私たちは、1つの場に集うことにより、互いに情報を交換し対話や議論を重ねることをとおして、多くの気づきやアイデアを得る。それらは、困りごとや悩みごとについての解決の方策はもとより、これからやってみたいことや仲間と一緒に創ってみたいことなど、多種多様である。そうした活動の中から、自分のためあるいは誰かのために何かしようとするボランティアな意欲が生まれてくる。このことは、同時に、集まった人同士が、互いに他者を認め合い、ともに生きていく知恵を創り出し、互いに高め合う過程でもある。

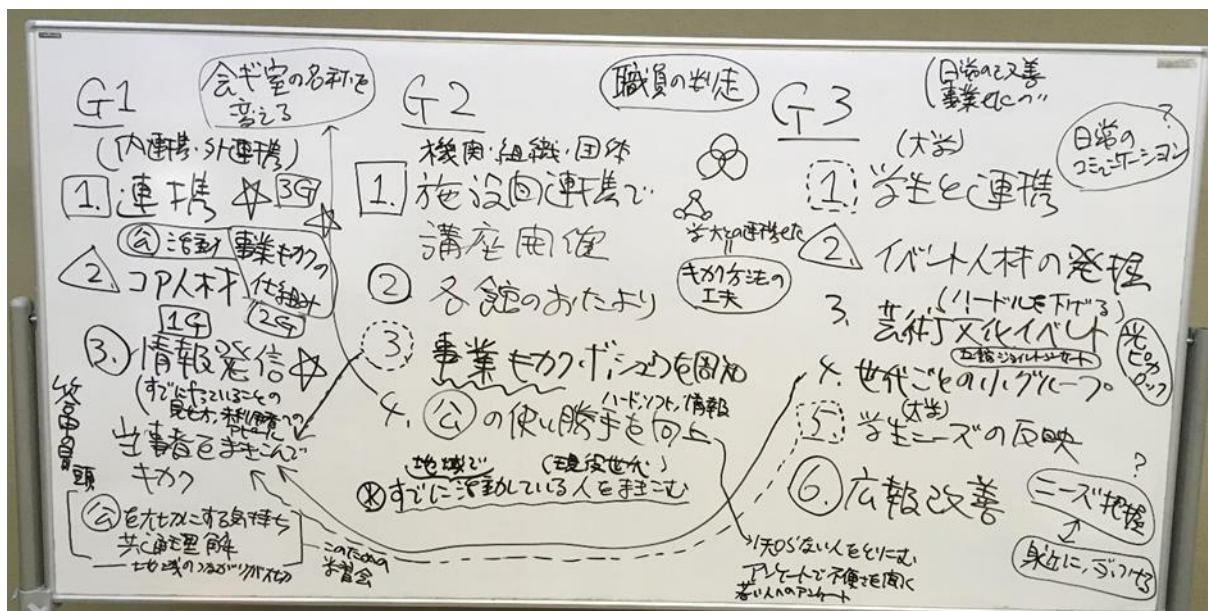
このように考えると、公民館は、孤立や分断が進行するウィズ・コロナの時代にあって、人々が、集い、つながり、より良い自分と地域を創っていく上で、なくてはならないものである。それは、すでに活動しているグループやサークルに活動の場を提供するという役割にとどまらず、何よりも、同じ地域に住む人々が地域を愛し世代を超えたネットワークを築く中で、バラバラになっている個人をつなげ、互いに生きていくための力を与え合う場としての役割を持つものである。

こうした公民館の現代的意義をふまえると、すべての人に開かれ、自由に参加し活動することができる場として、さらなる具体的な取り組みが求められていると言えよう。このたびの答申は、それを推進するための事業や運営のあり方について、提案するものである。

2. 本答申の視点

「はじめに」でも述べたとおり、当審議会に与えられた諮問事項は「ひととひとをつなぐ持続可能な公民館活動について」、具体的なテーマは(1)幼児から若者の世代にとって身近に感じられる公民館の運営について、(2)就労、子育て等の現役世代が気軽に集える公民館運営について、(3)すべての世代が公民館を舞台につながることができる公民館運営についてである。

そこで審議会では、まず上記の3つのテーマに関する実態を把握するため、各テーマに該当する事業を5つの公民館から抽出してもらい（資料2参照）、それぞれの実態、効果、課題などに関するレクチャーを受けた。それをふまえて答申の内容を検討する中で、答申を上記3つのテーマに基づいて作成するよりは、「公民館と他施設・他団体との連携」「事業企画に対する市民参画」（参画とは、物事を決める段階から参加すること）「的確な情報発信」という3つの視点に基づいて答申を作成するほうが好ましいと判断するに至った。



その理由は次のとおりである。諮問事項の3つのテーマは世代によって分かれており、それぞれの世代に対する公民館活動の課題を検討していくと、

各世代にほぼ共通の視点が必要になることが分かった。そして、それらのうち主なものが前述の3つの視点である（写真は、これらの視点を抽出するために集中的に議論した会議の結果をホワイトボードにまとめたもの）。そこで、これらに対応する委員グループを編成し、グループごとに当該視点に基づく答申案を作成した。それらを審議会の中で検討したうえ必要な修正を施し、最終的に本答申として統合した。以下に続くⅡ～Ⅳが、それぞれの視点に対応する章となっている。さらに、各視点に基づく施策の推進にとって必要となる共通の条件があるため、それらについては「むすび」で記述している。

Ⅱ 豊かな公民館活動を生み出す連携の拡充

1 公民館にとってなぜ連携が必要か

連携とは、独自の個性をもついくつかの施設や団体あるいは個人が、包括的な目的を共有しつつ、その目的達成のために共同で活動することで、個別の組織（個人）による活動の「弱み」を相互に補完して、それがもたらす成果を相乗的に高める効果をもつものである。

公民館は、人と人とが集い、つながり、関わり合い、互いに成長することを促す場である。まさにそこに集う人たちが「つながり、関わり合う（まなぶ）」ことで社会教育の中核的な場として役割を果たすことが期待されている。言うなれば、地域の人たちが「集い、つながり、関わり合う（まなぶ）」拠点（空間軸としてのつながりの拠点）として、また様々な世代の人たちが「集い、つながり、関わり合う」拠点（時間軸としてのつながりの拠点）としての役割を担っているのである。この点において、公民館は、集会所など、すでに活動している団体等に、貸出というサービスを提供している施設とは、明らかに異なるものであることを改めて認識する必要がある。

このような公民館本来の性格からすれば、特定の地域や世代に属する人たち（関係する団体等を含む）による日常的な利用に加えて、これまで公民館を利用したことのない人たちや地域の外にいる人たちが、進んで公民館に「集い、つながり、関わり合う（まなぶ）」ことは極めて重要であり、豊かで住みやすい地域を創っていく上で極めて大きな意義がある。

市政の一環として、これらを促すための連携を促進・支援するための仕組みづくりは、それを実現する上で欠くことのできない取り組みであるといえる。

2 具体的にどのような連携が考えられるか

(1) 公民館同士及び他の施設との連携

連携には様々な形がある。まず考えられるのは、公民館同士の連携である。例えば、市内に5館ある公民館の一部または全部が連携し特定の事業（イベント）の企画・実施を行うことが挙げられよう。これに加え、公民館以外の他の公共施設との連携も重要である。

例えば、児童館との連携については、様々なレベルで公民館と児童館とで情報交換したり、児童館利用者である中学生にも主体的に公民館に関わってもらい、そこでのアイデアを講座企画に反映させたりするのも1つの方法である。これらの取り組みを通して若者世代にも地域とのつながりを認識してもらい、生涯を通じた取り組みの機会を提供することができると思う。また、図書館との連携については、情報交換はもとより、合同で講座を実施したり、公民館での講座内容と図書館の所有する書籍をタイアップさせたりして事業内容をより充実したりすることが考えられる。さらに、特定の事業のポスター掲示やチラシ配布を一緒にしたりすることで参加者の幅を広げたりすることも重要である¹。このような取り組みの一部は、これまでも、市内の公民館や関係施設との間で行われてきており、今後は、さらなる拡充が望まれる。

こうした取り組みにより、事業に集まる人たちの範囲が広がり、その内容がより意義のあるものになることは言うまでもない。公民館という場で多種多様な交流や関わり合いが生まれてこそ社会教育が活性化するのであり、そ

¹ 令和4年11月に開催された「子どもまつり～興味わくワク体験まつり～」はその好例である。並木公民館、並木図書館、しんまち児童館、市立第五中学校が連携して、子どもたちに日頃の公民館などでの活動の成果を発表してもらったり、様々な体験をしたりする機会を設けた。そこには約1,600人もの人が参加した。

の輪が広がることは、地域づくりにとって極めて重要な意義を持つものと考えられる。

他方、連携のメリットは地域住民の側だけにとどまらない。事業を企画・実施する職員の側においても、連携をとおしての他館との情報交換やスタッフ同士の議論は、運営上の課題などを発見する良い機会となると考えられる。

こうした取り組みは、市外の公民館や他の公共施設との連携においても、同様の成果をもたらすと考えられ、まずは、市内の5公民館同士における連携から始めて、市内か市外か、あるいは公民館か否かにかかわらず、他の施設（図書館、児童館、その他）との連携（資料3参照）も視野に入れて、できるところから柔軟に連携を進めていく必要がある。

なお、その際には、どこまで連携が進んだかを年ごとの数値（トレンド・データ）として把握し、さらなる継続性のある取り組みの充実に資するため、教育委員会（公民館）として逐次その進捗状況を調べ、適切に評価・点検していく必要がある。

（2）公民館と地域の運営に関連する諸団体との連携

次いで、考えられる連携の形態は、市民活動団体、町内会あるいは一部の社会教育団体など地域運営（地域ガバナンス）に関連する諸団体との連携である。この場合、いくつかの場面が考えられる。

1つ目は、施設連携と同じような、相互協力による事業の企画・実施をつうじての連携である。それは、前述したように、事業そのものの充実に加え、参加者の社会教育活動として有意義な成果をもたらすものと考えられる。

2つ目は、公民館が、市民や市民活動団体による活動（学び）の成果を一堂に会して発表する機会を設け、情報の交流や共有の場をつくることによる連携である。こうした取り組みは、公民館と市民・市民活動団体とが「顔が

つながる」関係になることにとどまらず、互いに他の活動を理解し、実践レベルの相互連携にもつながり得るものと考えられる。

3つ目は、公民館を、市民活動団体や社会教育関係団体の活動拠点として利用してもらうという取り組みである。実際に、長野県松本市のある公民館は、昼は市民の活動の場として、夜は地域の青年団の活動拠点として利用されている。こうした取り組みは、公民館にとってみれば、恒常的に人や団体が集まり活動する場として有効に機能していることを意味しており、利用している団体にとってみれば、公民館が活動のプラットフォームとして利用できるということになり、双方にとってメリットがある。

ところで、地域ガバナンスに関連する諸団体との連携に関し、本多公民館、もとまち公民館、並木公民館では、関係する機関・団体の活動状況に関する情報共有を行ない、相互の協力関係をつくることを目指して「地域会議」がおかれている。そのメンバーは、公民館運営サポート会議、公民館利用団体、自治会、商店、小中学校、大学、社会福祉協議会などである。ここ数年、コロナ禍により地域会議の活動は低調であったと考えられるが、今後は、地域会議でのつながりを活かし、関係団体相互の協力のもとで、連携のさらなる拡充が進むよう、公民館・教育委員会にとどまらず市の行政全体として支援体制を整える必要がある。

(3) 公民館と学校との連携

さらに、公民館や学校における事業の拡充を図る観点や、若い人たちに公民館を知ってもらい活用してもらうという観点から、小中高等学校や大学・専門学校との連携は極めて重要である。

① 本市における連携事例

本市における主な連携事例としては、市立第九小学校の「総合的な学習・赤米を栽培しよう」の活動がある。これは、教師が赤米栽培の知識やノウハウをあまり持っていないこともあり、恋ヶ窪公民館が同公民館利用者による団体「赤米セミナー」を学校側に仲介したところ、稲作にかかる種蒔きから収穫までの一連の活動実践が可能になったという事例である。これは、「赤米セミナー」と小学校が連携したことで、一見不可能と思われることも可能になることを示しており、学校の教育活動を実現するために公民館が橋渡しをした好事例といえる。ここではまた、大人たちの活動を子どもたちが間近に見ることで、子どもたちは他では得られない貴重な経験を得たものと考えられる。

また、市立第九小学校創立50周年記念事業の一環で、恋ヶ窪公民館が公民館利用者に写真の提供を呼びかけたところ、多くの写真が提供されたという事例がある。これにより、写真のコレクションが著しく充実したことはいうまでもない。

上記の小学校との連携事例に加えて、中学校の関係では、市立第一中学校から恋ヶ窪公民館への依頼を受けて、平和に関する生徒の作品を公民館に展示した事例がある。これは、公民館から学校への日常的な働きかけと、作品を学校外に展示したいという美術教員の願いが合致して実現した事例である。14歳の生徒の作品が公民館に展示された事例である。

② 今後の方向性

以上にあげた事例は、連携のもたらす成果の大きさを示すものである。それでは、今後さらに公民館と学校との連携を発展させるためには、どのようなことに注力すべきであろうか。ここでは、下記の諸点を提案する。

1つ目は、日常のコミュニケーションである。効果的な連携を可能にするためには、日頃から、コミュニティ・スクール協議会などをとおして、学校関係者と公民館関係者が交流（意見交換等）をしていることが大切である。

2つ目は、学校施設を利用した公民館事業である。これまで行われてきた公民館まつりや事業（イベント）の会場を学校の施設（体育館など）に設定することで、学校の児童生徒の参加を得たり、教員や保護者等の協力を得たり、さらには多くの市民に集まってもらったりすることが可能になる。実際、恋ヶ窪公民館と恋ヶ窪公民館運営サポート会議との共催事業「お笑い芸人から生き方を学ぶ」には90人もの人たちが集まり、その講座の内容は参加者から高く評価されている。

3つ目は、授業等で来館する学生・生徒からのアイデア募集である。つまり、大学・専門学校との連携に関しては、学生による職場体験、社会教育主事任用資格の取得を目指す学生による社会教育実習、さらには学校の単位取得のためのボランティア活動などで公民館に来館している生徒や学生に着目することも重要である。すなわち、公民館に来ている機会を利用して、新たな視点や日頃の学習の成果をもとに、公民館の運営や事業について、自由に意見やアイデアを言ってもらうのである。これは、公民館やその活動に関心を持ってもらい、それらへの参加を促す良い機会であるという点で、連携の第一歩といえるものである。

4つ目は、公民館の運営サポート会議のメンバーを通じた連携である。例えば、多くの大学の教員やPTA関係者が本市の公民館の運営サポート会議メンバーになっていることを考えると、これらの関係者が所属する学校の学生や児童生徒に運営や事業企画に参加してもらうことも、連携の1つの方法と考えられる。これらの取り組みに対して、公民館の運営に関わる者や学生

がより参加しやすい体制や制度づくりを行うことが、公民館を含む市行政全体に求められる。

5つ目は、相互に資源を活用し合うことである。小中学校や大学・専門学校と公民館の連携を一層進めていくためには、学校によって取り組みの濃淡があることを踏まえ、例えば、公民館において学校の生徒の作品を展示したり、反対に、学校の「国分寺学」（学校教育において、地域資源（環境、人材）を活用し、地域に親しみ、地域に学び、地域に貢献する授業）において地域を学ぶ時間に公民館側から人材を派遣したりするなど、公民館にコーディネート機能を整備しつつ、相互に活発な資源活用が行われるような環境を整備することが重要である。

以上、ここでは5点を提案した。いうまでもなく、学校は、主に若い人たちの学びの場であり、小学校から大学まで地域に所在する学校と連携することは、若い世代に公民館を知ってもらい、彼ら彼女らの公民館利用を促し、より上の世代との対話や交流を生み出す意義を有している。

（4）連携による情報の収集・共有と発信

他方、活動と一緒にを行う連携に加えて、ともに情報を収集・共有し、協力して情報を発信することも連携の重要な場面である。

すなわち、市内外の施設や団体等により企画された事業などの情報を公民館が一元的に収集し、それをこれらの施設・団体等と共有して、国分寺市民はもとより他自治体の住民に対しても、広報誌、インターネット、SNS（FacebookやTwitterなどの活用）等で発信することは、連携の重要な取り組みである。関係者の連携のもとに常時これらの情報をアップデートすることには大きな労力が伴うが、すべての世代に公民館を知ってもらい、そこでの活動への参加を促す上で、重要な役割を果たすものといえる。

Ⅲ すべての世代の参画に基づく事業企画

1 様々な世代やテーマに関する当事者が参画する意義

公民館では、様々な魅力的な講座を開催している。しかし、公民館を普段あまり使用しない市民からは、「普段使っているSNSなどには、公民館の情報は入ってこない」「行きたくても日程が合わない」「チラシのデザインから、自分が対象者だと感じにくい」といった声も聞こえてくる。世代によって情報の受け取り方は異なり、またテーマの絞り方なども対象者によって大きく異なる。そのため、実際に市民に参加してもらえる講座等の事業をつくるためには、様々な世代やテーマに関する当事者の声を事業企画に活かしていくことが求められる。そのために、職員は様々な場面でヒアリングを行っているが、それだけでは当事者のリアルな感覚を活かし反映していくのは難しい。やはり、実際に市民に事業企画に参画してもらい、共に講座等の事業を企画していくことが重要であり、それを促す仕組みが必要なのである。

テーマに関する当事者と共に講座を企画していくことができると、どのような内容がいいのか、どのような日程がいいのか、どのような表現で広報していくといいのか、どのような配慮が必要なのか、こういった1つ1つのことに当事者の感覚を反映していくことができる。その結果、もっと多くの市民が「この講座は自分のための講座だ」と感じることができ、公民館に新しい利用者が来てもらえるのではないだろうか。

また、社会教育施設としての公民館の役割、という視点で考えてみても、講座を共に企画していくということの意義は大きい。当事者の抱える個人課題を地域課題として講座にしていくことは、当人の大きな学びともなり、そ

の学びをきっかけにつながりを広げ、新しい活動を生み出すきっかけとしていくこともできる。

本章では、こういったすべての世代の市民が参画し、共に進める事業企画のための仕組みづくりについて提案する。

2 事業企画に市民が参画する仕組みの現状

現在、講座づくりに市民が参加する仕組みは複数存在している。公民館のホームページには、公民館が市民からの講座の提案を受け付けている「事業企画募集」というページがある。また、公民館を利用するグループと公民館が共催で開催する講座の枠は各館に存在し、そのための企画シートなどの枠組みは整っている。さらに、公民館運営サポート会議や利用者懇談会の参加者と共に講座を企画することもあり、他の講座の参加者に職員が働きかけ、新しい講座を企画していくこともある。

これらはすでに公民館につながっている人たちとの事業企画であり、まだ公民館を利用していない新しい参加者を呼び込むための視点や感覚を活かしていくといった点においては課題が残る。

3 市民が事業企画に参画した事例

それでは、これまで公民館事業において、市民が参画した事業企画にはどのようなものがあるのだろうか。いくつか具体的な事例を挙げながら、そのポイントを整理していく。

(1) 公民館と地域コミュニティとの共催講座

①本多公民館とPTA連合会の共催講座

本多公民館と「国分寺市小・中学校PTA連合会（P連）きょうどう学習委員会」が共催で行う教育講座がある。これは第2期国分寺市公民館運営審議会答申で提案され、平成31（2019）年度より始まった。P連の委員が問題意識を持ち寄り、本多公民館が講座を開催するノウハウを持ち寄ることで、当事者の視点が入った講座をつくることができる。P連の委員の多くは公民館と関わってきておらず、この講座で初めて公民館に足を運んだという委員も多く、講座実施後に委員から「この企画を通して初めて公民館を知った。自分の問題意識が講座になるとは思っていなかった」といった声も寄せられている。また、コロナ禍で行われた教育講座は、オンラインとリアルハイブリッド開催（zoom等のオンラインによる参加と対面による参加（リアル）を組み合わせた講座の開催形態）となど、現役世代の力を活かし、時代のニーズに合わせた形での開催となった。

②光公民館の「くにきたデザインクラブ」

光公民館で開催された地域づくり講座「くにきたデザインクラブ」では、国立駅北側エリアで地域活動を行っていた市民と共に事業企画を進め、新しい地域の活動を生み出している。講座の卒業生を中心にSNS等を活用し、もともとの地域活動の仲間を中心に、公民館利用者だけではない活動に広がっている。また、おしゃれな雰囲気から活動に興味を持つ市民もいる。

これらの事例は、どちらも職員が公民館の中だけではなく、すでに市民が集まって活動しているところにアプローチして、共に講座の内容を企画している。P連の委員からは「公民館がこういうサポートをしてくれるとは知ら

なかった」という声も挙がるなど、公民館職員が持つ専門性を多くの市民に伝授して広めていく機会としても、地域のコミュニティと連携して企画することの意義は大きい。

(2) 学生の力を活かした事業企画

①もとまち公民館の社会教育実習生による講座

もとまち公民館で行っている社会教育実習では、実習に来ている大学生が、学生自身で感じる地域課題をもとに講座を企画しており、より若い世代に訴求する講座となっている。また、学生が新しいツールを活用したデザイン性の高い広報チラシは、視覚的にも訴求している。このチラシを見た現役世代の「最近の公民館では、私たち向けの講座をやってくれるみたいだね」という声もあり、新しい市民が参加するきっかけとなっている。

②高校生も運営する光公民館のイベント「ピカロック」

光公民館で毎年開催されている音楽イベント「ピカロック (PIKA☆ROCK-LIVE HIKARI-)」では、事前にステージ照明や音響の操作に関する講座が開催されており、その講座に参加した高校生が大きな役割を持って運営が行われ、ライブに参加して演奏を披露するだけではない活躍の機会となっている。

これは、どちらも大学の実習や高校の部活の枠組みで連携しており、毎年新しい学生がやってくる。そのたびに新しい視点が入り、これまで公民館に来たことのない人が参加する機会となっている。

(3) 利用グループによる5館共同事業の企画

利用グループ発案による企画もすでに実施されている。公民館運営審議会の中で、5館のグループが集まって企画を考えたことから、5館ジョイントコンサートがコロナ禍で中断となるまで4回開催（ほぼ毎年）された。5館共催の催しを開催することにより、他の公民館の利用につながり、企画の規模も大きくなり、より多くの市民に来てもらうきっかけとなった。共に事業企画を考える機会があるということが、こういった新しい企画を生み出したのである。

(4) 講座に参加するだけでなく、活躍の機会をつくる

これらのどの事例においても、ただ講座等の事業に参加するだけでなく、一緒に事業をつくるといった経験をすることで、より公民館について深く知ることができ、公民館の活動に愛着を持つきっかけとなっている。特に学生においては、講座を受けること以上に自らの活躍の機会を求めており、何かできることがあったらやってみたいという気持ちを持っている学生はとて多い。公民館のサポートを受けながら講座を企画していくことで、学びの機会になるだけでなく、役に立てるという実感を持つことができ、自己肯定感を高めることもできる。また、スマホの操作やアプリの使い方などにおいては、子どもや若者の方が詳しいことも多く、子どもや若者が事業企画に関わることで、高齢者に教えるという形での多世代交流の機会も生まれていく。

地域に人材がいないと言われることもあるが、実際には地域で活動していたり、したいと思っていたりする現役世代や学生はたくさんいる。そういった若者たちに、公民館という場を使って活動してみたいと思ってもらえるようなアプローチとサポート体制を、どのように提示していけるのかといった点が重要である。

4 市民参画による事業企画を促す仕組みの提案

以上のように、市民参画による事業企画として、すでにいくつかの事例が生まれている。これらをさらに発展させるとともに、新たな市民参画が次々と生まれてくるための仕組みを整えることが重要である。そのための具体的な取り組みを提案する。

(1) 『企画募集チラシ』で市民参画のきっかけづくり

まずは、市民が事業企画に参画できる、ということを周知していくことが重要である。現状は、公民館のホームページに掲載してあるだけで、ほとんどその点に絞った周知は行われていない。そのため、「一緒に講座をつくりませんか」といった趣旨と公民館の紹介をまとめた『企画募集チラシ』を作成し、様々な機会に市民に届けていくといった方法が考えられる。これは、学生や若者世代と一緒に、訴求力のあるデザイン性の高いものをつくっていくと、より効果的である。

『企画募集チラシ』の配布先としては、市内にある様々な施設や連携する団体が考えられる。具体的には、図書館・児童館・地域センターなどに配架してもらい、関心がありそうな利用者には積極的に直接配布をしてもらうよう依頼する。また、こくカレ（こくぶんじカレッジ）、子ども子育て円卓会議、観光まちづくり協会といった、市内の他の部署が行っている市民や活動団体が集まる機会に出向いて行って、公民館の紹介とともに配布するといった方法もある。PTAや社会福祉協議会などの市内の団体や、地域のお店等に配架・配布してもらうという方法もある。チラシがあることで、職員だけではなく、公民館運営サポート会議のメンバーなども配布しやすくなり、より多くの市民に届けることができる。

(2) 公開企画会議・企画大会の創設

実際に事業企画を行う場をつくるという事も重要である。公民館の利用者・未利用者のどちらでも参加できる「公開企画会議」を行い、市民がやりたいことを持ち込める場を用意する。その場は新しい利用者との出会いの場にもなるし、すでに公民館を利用しているサポート委員やグループ利用者なども、講座等の事業を企画するとなると、また新しい視点で公民館とのかかわりが生まれてくるのではないだろうか。

上記のチラシを渡していく際にも、こういった場に参加してほしいと声をかけることで、事業企画に参画するハードルはやや下がる。自分が何かを生み出さないといけないのではなく、誰かと話しながら企画を考えていくとなると、新しい企画も浮かびやすくなる。そして、地域の中で何か活動しているおもしろい方と出会った時には、とりあえず公民館の「公開企画会議」にお誘いするといったような流れができてくるとよい。それぞれの公民館の特色を活かすことを考えると、全館が集う機会も必要である。全館が集まる公開企画会議は年に1回程度、各館での公開企画会議は年に数回開催できるとよいのではないだろうか。

さらに、企画会議が発展した形として、考えた企画をプレゼンして表彰する「企画大会」が開催できると、さらに盛り上げていくことができるであろう。大会で事業企画が生まれることで、アイデアを形にしていくということのおもしろさも広がっていく。また、中学生や高校生などの部門を設けて表彰することで、地域の学校との連携をより強化していくこともでき、個々の学生にも公民館を知り身近に感じてもらうきっかけとなるのではないだろうか。

(3) 図書館・児童館との事業企画

国分寺市の公民館はすべて図書館と併設されており、それぞれの利用者が行き来できるといったメリットがある。これまでも公民館の講座のチラシを図書館に配架したり、講座の内容に合わせた書籍展示を行い、また公民館でも講座の際に図書館から書籍を借りたりといった連携は行っている。しかし、事業企画という視点での連携の実績はほとんどない。図書館で話題になっている本やその作者を呼んだ講座など、図書館の利用者が参加したくなる講座を、図書館や図書館の利用者と共に企画していくということもできる。そのために、まずは図書館と公民館が連携して共に事業企画を行う体制づくりが重要である。

また、公民館の近くに児童館がある地域も多い。児童館で遊ぶ子どもたちが、公民館に触れ、使い方を知り、講座などを企画することができるを知ることは、児童館から活動を広げていきたい子どもたちの選択肢にもなる。児童館の中で、ゲーム大会を主催するために部屋を借りるといった手続きを行う子どもたちもいるとのことである。そういった活動をさらに広げて、公民館でイベントを行うこともできると知っていくと、子どもたちも地域とつながり、児童館を卒業する年になった時の新たな活動の拠点として公民館を活用することができるようになる。そこから、また新しい事業企画も生まれていくであろう。

こちらも、年に3～4回、定期的な情報共有や企画会議を行い、どのような事業を企画していくのかを検討する機会を改めて設置していくとよいのではないだろうか。それぞれの特色を活かした事業企画を生みだしてほしい。

(4) 学校との事業企画

市民と共に事業企画を行う上で、学校との連携は欠かせない。すでに、子どもたちが地域探検や職場体験で公民館に来るといったことは行っているが、自分たちの関心事から公民館の講座を考えてみるということを授業の中に取り入れていくこともできるのではないだろうか。総合的な学習の時間や職場体験を、「公民館の講座を考えてみる」といった内容で行い、その案を実際の事業に活かしていくことで、案を出した子どもたちはもちろんその友だちや保護者にも、公民館に足を運んでもらえるきっかけとなる。また、事業にならなかった案も、企画大会などの場で表彰するといったことができると、子どもたちにとって公民館がもっと身近な存在になっていくのではないだろうか。

国分寺市内の公立小中学校では令和5年度より「国分寺学の創出」に取り組んでいる。ここにも、公民館として協力できることがある。例えば、過去に公民館で開催してきた講座やグループ企画などを一覧化し学校に提示することで、教員が授業内容を考える際に、地域の人材やグループとどのような連携ができるのかといったイメージを持ってもらうことができる。そして、実際に講座等の事業を企画する際、公民館の職員が間に入ることで、教員の負担を減らしながら、地域と連携して授業をつくっていくこともできる。学校と公民館が連携して「国分寺学」を活用していくことで、子どもたちが地域に出会い、つながっていく機会をより良いものとするのではないだろうか。

5 事業企画を進める上での重要なポイント

最後に、公民館が市民と共に事業企画を進めていく上で重要な点を述べる。1つ目は実際に顔を合わせて話をする機会を持つという事である。コロナ禍でなかなか顔を合わせる機会は減ってきてしまっているが、オンライン等も活用し、直接顔を見て話すことで双方の細かいニーズまで確認することができる。一方的なコミュニケーションでは事業企画は生まれない。

2つ目としては、企画は公民館の外で生まれるということである。それぞれの市民の生活の場に直接出て行って話をするすることで、一人ひとりが抱える生活課題等もより具体的に把握でき、より訴求力のある事業企画にもつながる。

3つ目としては、それぞれの分野にいるコーディネーターにつながっていくということである。いきなり市民に直接つながるということは難しいが、多くの地域課題やテーマについても、コーディネーター的な人材はいる。その人に、公民館を活用していくという視点を共に持ってもらい、共に事業企画をしていくことで、その人の後ろにいる市民とのつながりが生まれていく。

4つ目としては、事業企画する、講座を主催するという経験を楽しんでもらうということである。講座等の事業を企画すると聞くと、「大変そう」「人を集めないといけない」「責任が取れない」と感じる市民も多い。しかし、自分の生活課題が地域課題となって仲間が増えていくという活動は、本来楽しいものである。この楽しさを感じてもらうことが重要なことであり、職員はそのためのサポートをするといった視点が重要である。

5つ目としては、具体的に困っていることや課題、また講座の開催に向けて必要なことをみんなで共有していくという事である。何に困っているのか、どんなことがあればいいのかといったことが具体的にわかると、自分の得意

な分野で協力していく関係を築いていける。市民が活躍できるように、できるだけ具体的に必要なことや状況を挙げ、参画の必要性を見せていくことも重要である。

公民館は人と人をつなぐ起点である。市民が何か生活課題を感じた時に、それは地域課題として講座にして共有していくことで、仲間をつくっていきけるのだという、社会教育が持つ力を広めていくことは、まちづくりの力にもなる。「講座をつくる」という学び方があるという事を多くの市民が知り、公民館の事業企画に参画し、また公民館自体も様々な施設や地域活動団体と連携していくことで、社会教育を中心としたまちのネットワークができあがり、「学びの循環」（第2次国分寺市教育ビジョンのキーワードで、あらゆる場での学びを通じて、人と人とがつながり、互いに学び合い、学びが継承され、まちに学びがあふれる状況を示す）を生み出すことができる。それこそがこれからの公民館に求められる役割ではないだろうか。

IV 地域の拠点「公民館」からの情報発信

1 公民館情報は届いているか

公民館では、「人と人」、「人と地域」、「地域の異なる世代」がつながることができる。公民館は単なる貸室、箱モノではなく、活動の場所であり、発信の場所でもあり、そこでは居場所を探すこともできる。

国分寺市の公民館は、中学校区に一館ずつ設置され、5館で様々な講座や事業が開設されている。各公民館ではさまざまな活動が展開されており、やりたいことを探せるし作ることもできるのである。

人生100年時代、生まれてからいつまでも、誰もが公民館で世代を超えて活動して欲しい。利用経験が豊富な市民は、公民館の楽しさをわかっている。しかし、広く市民に公民館情報は届いているのだろうか。今後、公民館活動が持続可能性を高めるには、これまで利用していない未利用者や、将来を担う子と親世代に公民館情報を届ける必要がある。

誰が公民館情報を必要としているのだろうか、また必要としている人はどこにいるのだろうか。そして、届いているのだろうか、どのような方法で届けられるだろうか。

2 情報発信の現状

現在、公民館の事業やイベント、講座を広報する方法として毎月15日発行の『けやきの樹』、ホームページ、Twitter、各館のチラシが中心になっている。それらはターゲットを絞らずに全市民に発信するものであり、市民の側からすればたまたま目に入ったとか公民館に置いてあったから見たという形

がほとんどだと思われる。もちろんチラシ作りにもいろいろな工夫がされてはいるが、十分に効力が発揮されているところまではいっていないと思われる。

ところで、情報発信は、タイプとメディア分類によって下記のようにグループ化することができる。

☆情報発信のタイプ（表の1，2）

1. 公民館そのものを知ってもらうこと（未利用者にとって重要）

例）公民館を知る講座，利用者グループ紹介企画，わくわく体験ツアー

2. 実施している講座・イベントの告知

例）人権・子育て・歴史など各種講座 グループ企画事業・共催コンサートなど

☆現状のメディア分類（表のA～F）

A. 『けやきの樹』：まだまだ紙の情報は強い。さらに全戸に配布は情報伝達の貴重な手段になっている。

B. 国分寺市ホームページ：意識と意欲があればアクセスして講座や事業をいつでも探し出せる。

C. 講座紹介チラシ：公民館内に置かれていて、講座や事業をより詳細に紹介されている。

D. 『公民館運営サポート会議だより』：各館により内容，発行頻度は異なるが，講座参加者の体験に触れられる。

E. 地域会議・利用者懇談会・サポート会議：会議・会合は参加も多種多様で，公民館情報がいっぱい詰まっている。

F. SNS等：若い世代に効果的で，情報発信のツールとしてさらなる活用を検討しなければならない。

以上から、情報のタイプとメディアの関係を表にまとめると、下記のとおりである。○は強い関係、△は弱い関係を表す。A～Fは上記の項目に対応する。

	A	B	C	D	E	F
1. 公民館そのものを知ってもらうこと	△	○	△	○	○	○
2. 実施している講座・イベントの告知	○	○	○	△	△	○

公民館の事業や講座は、実施される内容が重要であり、情報を受け取った自分にとってその事業や講座がプラスになり魅力があれば、公民館に足を運んで参加する興味も湧いてくる。しかし、たとえ内容が充実していても、広報の仕方次第では残念な結果になる（資料4参照）。

3 現状の評価を踏まえた今後の方向性

2で述べた現状評価をふまえ、情報発信に関する今後の方向性を下のよう
に整理することが出来る。

(1) ターゲットの明確化

公民館からの情報発信は、これからは特に未利用者への情報発信と工夫が大事になる。その方法の1つとして、講座や事業によって対象となる人やターゲットを絞って発信することが考えられる。例えば、小さい子供や保育関係の講座ならば、児童館・学校・PTAなどを中心に告知をする。高齢者向けの講座であれば、町内会の回覧板の活用、自治会、病院、公共施設への案

内の配布が有効かもしれない。小中学校に公民館講座のメニューを渡しておく、各学校が総合的な学習の時間での学習活動に講座を活用しやすくするのも一案である。高校生や大学生向けであれば学校に出向いて発信が出来る。この場合には、情報発信だけではなく、学生に対して企画段階からの参加を提案することが、学生の関心を喚起することに有効かもしれない。子供・若者の段階から公民館に触れることによって将来の熱心な利用者になるかもしれない。この年齢層への情報発信はとりわけ重要である。

(2) 市民と職員のコミュニケーション

ホームページも改良されつつあるが、公民館未利用者が公民館に関心を持つきっかけを調べてみると、実際には『けやきの樹』を見て参加する人が多い。しかし、特定の講座をクローズアップしてアピールするためにはチラシが有効である。情報発信はSNS等によるデジタルとチラシ等による紙の両面から充実させることが急務であり、それには公民館の職員の工夫がより必要になる。また、魅力あるチラシ作成のために、公民館職員の相互協力と、講座参加者のアイデア活用が有効ではないだろうか。このような情報発信の創意工夫と共に、さらに重要なことは、主催講座はもちろん、共催講座、利用者独自のイベントなども、市民と職員のコミュニケーションと相互協力によって魅力ある事業や講座となり、それが公民館のグレードアップにつながる。

(3) 「次に核になる人」の係わり

そして、情報を受け取る側は事業の魅力、講座の魅力を判断することになる。現在、公民館職員が企画立案を担ってくれている。今後、公民館の情報発信、事業や講座の情報発信の視点からは、「子育てや教育に関心のある高校

生，大学生，若い世代」（ここではSNSが有効だろう），「利用者，グループで活動している人」，「核になっている人（公民館の「沼」（魅力）に浸っている人）から受け継いだ，次の核になる人」が，事業や講座の企画立案の一角に参加することが，情報発信そのものになるのではないだろうか。

（４）ガイドブックの作成

コロナ禍も収束に近づき，今まで参加を控えてきた人も公民館に足を運ぶ事が増えると思われる。各館の特色や講座などを載せたガイドブックを作り，人の集まる場所に置いてもらい，手引きにすることもできる。若者層には，各種メディアやSNSの活用を工夫しての発信が重要になり，そのフォロワーやインフルエンサー（影響力をもつ人）を育てて情報発信に活用することも検討してよいかもしれない。従来からのアナログを尊重しながらも，これからのデジタルの活用をする事が，各世代に魅力を伝えることが出来る情報発信の方向と考えられるので，対応をこまめにチェックしていくことが今後の課題となる。

（５）発信内容の３つの柱

情報発信には，３つの柱がある。これらを各館の特性に照らして適宜組み合わせながら発信していくことが重要である。

①公民館の魅力

「講座がある」

「事業がある」

②発見できる魅力

「やりたいことを探すことができる」

「地域や人の課題を解決できるかもしれない」

「もし無ければ、公民館と一緒に創ることができるかもしれない」

③繋がれる魅力

「人とつながれる」

「地域とつながれる」

「異なる世代とつながれる」

(6) キャッチーなワードの活用

そして、公民館にはこんな講座や事業がある、あったらいいな、そんな情報を発信するには少しばかり遊び心やキャッチーなワードも活用していいのではないだろうか。例えば、国分寺の5つの公民館を「ゴレンジャー」に例えたアピールをするのはどうだろうか。毎年春夏に各館で開催されている公民館まつりを、5館同時開催して、『市報 国分寺』や『けやきの樹』を公民館祭り一色に占拠することはできないだろうか。すでに実施されている「グループ紹介講座」(本多, 並木)や「公民館デビュー事例紹介」, 「公民館わくわく体験ツアー」(本多), 「並木芸術ギャラリー」(並木)は、公民館未利用者へ情報を届けられるアプローチになる。各公民館の「講座成功例」, 「イベント成功例」には、情報発信のための大切なヒントが蓄積されているため、これらの成功例をお互いに共有し、自館の向上につなげていくことが肝要と思われる。

4 公民館の将来に向けて

公民館を知ってもらうことは、なぜ必要なのだろうか。

日本では少子高齢化, 人口や仕事の減少が進んでいる。終身雇用の就労環境が変わり, すぐそこに来ている人生100年時代には誰もが, 生活の仕方と地

域を意識しなければならなくなる。いつまでも誰かが守ってくれると楽観ばかりはできない。足元を見れば、行政の機構改革、経費削減も進んでいる。

しかし、生活の仕方を意識する時に、居場所も健康も経済も子育ても介護も趣味も、公民館で探せば見つけることができる。地域を意識しなければならぬ時に、地域をつくる主役は私達になる。地縁でつながる人と人、趣味や興味でつながる仲間達が、公民館を「地縁同好の場所」としていろいろなつながりを生み出すことができる。

このように、強弱はあっても、公民館には様々な「きっかけ」が転がっている。この「きっかけ」を多くの市民につかんでもらうためには、まず公民館に足を運んでもらう必要がある。それには、人々の気持ちを公民館に惹きつけなくてはならない。

だからこそ、情報発信が重要である。情報発信を怠れば、将来を担う世代の人たち、多様な人たちは公民館に来ない。そのため、公民館の将来は情報発信にかかっている。市民が豊かな気持ちで人生を送るために、そして公民館がその持続可能性を高めていくために、情報発信の工夫を怠ってはならない。

むすび— 3つの視点に基づく施策推進の条件—

Ⅱ～Ⅳで述べた各視点に基づく施策を推進することにより，子どもから高齢者まで，未利用者を含めてあらゆる世代の市民が公民館を利用する可能性が飛躍的に高まるはずである。そのため，諮問事項の具体的な3つのテーマ，すなわち(1)幼児から若者の世代にとって身近に感じられる公民館の運営，(2)就労，子育て等の現役世代が気軽に集える公民館運営，(3)すべての世代が公民館を舞台につながることのできる公民館運営は，これらの施策によって促されると考えてよい。

ただし，それにはいくつかの条件が満たされなければならない。

第1に，職員の力量の維持・向上である。ⅡとⅢで記述した特色ある現在の連携事業及び市民参画型の事業企画は，職員の創意工夫と実践力に支えられている。Ⅳで述べた情報発信についても，職員のアイデアによって参加者募集に成功している例は少なくない。そして，各章で提案したことを実現するには，さらに力量を向上させることが求められる。効果的な研修や資質の高い職員の確保が不可欠である。

第2に，日常的なコミュニケーションを促進することである。Ⅱでは学校関係者と公民館関係者の交流，Ⅲでは「顔を合わせて話をする機会」，Ⅳでは市民と職員のコミュニケーションの重要性があげられていた。いずれも，市民同士や市民と職員，あるいは公民館関係者とその他の施設・団体の関係者など，多様な人々の間でコミュニケーションが誘発されるような環境を整えておくことが条件となる。

第3に，公民館と学校との関係を密にしておくことである。Ⅱ～Ⅳのすべてにおいて，子ども・若者と公民館との強固な関係を前提にした提案がなされている。コミュニティ・スクール協議会などを媒介に，公民館と学校，つ

まり公民館職員と学校の教職員との関係を日常から丁寧に築いていくことが必要である。

以上のように、本答申で提案した3つの視点にもとづく施策は、職員の力量の維持・向上、日常的なコミュニケーション、公民館と学校との関係といった、基礎的な条件を整えることによって推進される。今後における公民館関係者のさらなる努力により、これらを高いレベルで担保し、諮問事項である持続可能な公民館活動の実現に向けて邁進してもらいたい。

〈資料編〉

国教教公発第196号
令和4年2月25日

国分寺市公民館運営審議会
委員長 田中 雅文 様

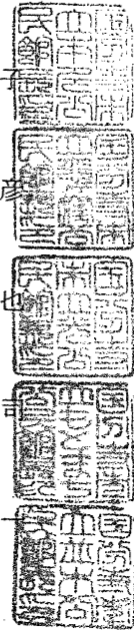
国分寺市立本多公民館
館長 本多 美子

国分寺市立恋ヶ窪公民館
館長 加藤 征彦

国分寺市立光公民館
館長 勝山 俊也

国分寺市立もとまち公民館
館長 久保 祐司

国分寺市立並木公民館
館長 本望 慎一



ひととひとつながり持続可能な公民館活動について(諮問)

これまで第1期から第3期までの国分寺市公民館運営審議会より、6つの指標に基づく「地域づくりを目指した公民館のあり方」、サードエイジ世代の地域デビューや子どもを主役とした地域活動の展開等に関する「国分寺のまちを学び共に創り出す公民館活動の今後について」、「新型コロナウイルス感染症対策下における公民館の役割」について答申をいただきました。

現在、これらの提言に基づき、公民館は運営・事業を展開しています。しかし、利用者の高齢化、市民の学習ニーズの多様化など様々な課題に直面する中、幼児から高齢者まで多様な年齢層がそれぞれの自己実現を図るとともに、相互につながり学びあい、よりよい活動を継承していくための公民館活動が求められています。今回は、これを「持続可能な公民館活動」と呼び、それを実現するために運営面・事業面の両面からご意見をいただきたく、下記のとおり諮問いたします。

記

1 諮問事項

ひととひとつながり持続可能な公民館活動について
具体的なテーマ

- (1) 幼児から若者の世代にとって身近に感じられる公民館の運営について
- (2) 就労、子育て等の現役世代が気軽に集える公民館運営について
- (3) すべての世代が公民館を舞台につながることのできる公民館運営について

2 答申時期 令和5年5月

(1) 幼児から若者の世代にとって身近に感じられる公民館の運営について

本多	恋ヶ窪	光	もとまち
<p>・異世代交流事業（平成14年5月開始）。テーマごとに地域の大人が講師となり，子どもと一緒に遊びながら学ぶ。</p> <p>●子どものときに公民館を利用し，大人になってからもさらに利用が活発になる可能性がある。</p>	<p>・中庭キッズ水遊び事業。中庭を活用し，乳幼児向けの水遊びを行う。</p>	<p>・三館合同事業 ひかりナイトツアー。図書館，児童館，小学校PTA，青少年育成西地区委員会などと連携して，企画や運営にも携わる協働参加事業。</p>	<p>・もとまちこどもキャンパス。学校で学べない分野や学校で学んだものをさらに深めるような取り組みを夏休みや春休みを中心に企画し，子どもたちに公民館を知ってもらえる機会を作る。</p>
	<p>・ジュニアサロン学びの広場事業。フォトグラファーによる写真講座や，声優による声優体験講座，地域で切り絵や折り紙の得意な方による切り絵折り紙講座などを実施。</p> <p>・子ども中庭コンサート事業。親子で一緒に，プロミュージシャンの廃品を使った楽器演奏を聴き，身近にあるものでも音楽ができる楽しさを知る。その後，実際に自分たちでも廃品楽器を全員で合奏</p> <p>●やかましいと思う方もいるかと思うが，子どもたちが活動している，声が聞こえるというのは，癒される。</p>	<p>・ピカロック。スタジオ利用グループを中心に，日ごろのバンド練習の成果を発表し，音楽を通じた交流を深める。当日の運営も分担して行う。</p> <p>●多世代が企画・運営に携わりつながることができる。</p> <p>・体験しよう はじめての手話。親子で楽しく手話を体験してもらおう。言葉以外の表情や身振りなどによるコミュニケーションを体験し，自己表現力の向上を目指す。</p>	

テーマ別プレゼンまとめ

(1) 幼児から若者の世代にとって身近に感じられる公民館の運営について

並木	全体意見
<p>・学習支援事業：4つのおもしろいはなし～地域のエキスパートに学ぶ～。学校や塾の「勉強」ではなく，身近な地域の大人による様々な分野の専門的な話をきく。</p> <p>・子ども農業体験講座 自然に学ぶ 地域で育つ。農業体験講座の受講者を講師として指導を受けながら農業実習の説明を聞いて農作業を体験する。</p> <p>●参加者の親から一緒に参加したいという要望がある物理的・時間的に難しい。</p>	<p>・子ども向けの企画だとしても，大人の関わり方が大事な構造になっている。</p> <p>・他市と比べると国分寺市の公民館は子ども向けの講座を多くやっている。</p> <p>・講座を打てば，興味のある子どもは参加するが，公民館を身近に感じているかは微妙。ふらっと立ち寄る場所がない。</p> <p>・子ども農業体験講座では，保護者の方が背中を押して来させてくれた。そのお子さんや保護者が，改めて公民館に興味を持ってくれるきっかけを作り，それを取り込むことができれば，講座としてはいいのではないか。</p> <p>・子ども・若者の中でも小学校の子どもたちをかなりターゲットとした事業が多く，若者の部分はあまりない。中学生から含めていいが，中学生，高校生，そして大学生辺りまでを含めた若者の部分をどうするか，やはりここでは1つの論点として考えなければいけない。</p> <p>・恋ヶ窪公民館で，一中の生徒さんのSDGsの発表をされたということで，中学生，高校生，大学生くらいまでの子どもを主役にして，地域の人が逆にそれを教わる，聞きに来るみたいなことを企画とする活動をしたらいいのではないか。</p> <p>・子どもたちが学校で日常的に学んでいることはたくさんある。それを発表できる場，そして発表してもらったことに対して大人たちの評価とか称賛があれば，次にこういうのをやってみたいとか出てくるかもしれないし，それが中高大くらいまで続くといいかなと思う。</p> <p>・特に中学生，高校生は思春期で回りの目を気にする部分があるので，1人で公民館に行くというのはすごく行きにくい，友達何人かでワイワイ行くととなると，行こうかなと思う世代。なので，友達を誘いやすい企画や，活躍できるような内容の視点が大きくあるのかなと感じる。</p> <p>・一番大事なことは，対象としている世代が何をやりたくて，何に困っているのか。あるいは親を含めて，どういうことに困っていて，どうしたらみんなが喜んでくれるのかというか，親も公民館が必要だということ想像力豊かにして，あるいはいろいろなところから話を聞いて，把握していく必要があると思う。そういう意味では，世代の離れた人たちに対してどういう事業を見ていくのかは，いろいろな形で情報を知って，できるだけ彼らを理解し，寄り添う。彼らが豊かに成長できるように事業をやるということが大事になってくる。</p>

テーマ別プレゼンまとめ

(2) 就労，子育て等の現役世代が気軽に集える公民館運営について

本多	恋ヶ窪	光	もとまち
<p>・子どもの力を伸ばす～大人のかかわりを考える。PTA・PTA 連合会と公民館による協働講座として，1 回目は対面とオンライン，2 回目，3 回目はオンラインのみということで開催。</p>	<p>・多文化共生講座。外国にルーツのある子どもの学習を支援することの必要性の理解。恋ヶ窪公民館で実施している国際教室事業での学習支援の担い手を増やすために国分寺市国際協会との共催で実施。</p>	<p>・お父さん応援講座「家族と一緒に」。家族でキャンプの時に必要な，火おこしやテントの張り方など屋外で活動する際に必要な知識や技術を習得。防署指導で，AED 講習，応急救護講習を合わせた。託児付き。</p> <p>● キャンプのお父さん主体に組んだ講座は珍しい。と同時に，消防署の指導で AED の講習もやったりするというので，二面性で勉強できる。こういう組み合わせというのはすごく面白い。</p>	<p>・子育て家庭のマネープラン。子どもの教育費，住宅ローン返済，老後資金など子育て世代の「お金」に関する不安や悩みについて，正しい知識を学び，知識を得る。</p> <p>● マネープランは，今の人にはものすごく関心があるようなテーマだと思う。</p>
	<p>・子育て関連講座。①乳幼児の緊急時に AED 等の活用。②子乗せ自転車を含む自転車の安全運転。③ハーブや花の育て方を講義と実技。</p>	<p>・子どもに持たせる初めてのスマホ講座。子どもがスマホの利用により犯罪に巻き込まれないよう，保護者が正しい知識習得し，安心して使用できるために必要な知識を取得する。</p> <p>● インターネットの付き合い方はテーマ候補として毎回挙がるぐらい，保護者の中の関心としてはすごく高いが，複雑で難しいという結論のゆえに，最終的な学習テーマになりにくいので，そういう形でお話を聞ける機会があるというのはすごくありがたい。</p>	<p>・子育てを楽にするコミュニケーション術。コロナ禍で，家庭で子どもと保護者がいっしょに過ごす時間が増え，保護者と子どものコミュニケーションの重要度がより高くなった。親子間だけでなく，職場など周囲の人とより良い関係性を築く方法をロールプレイなどの実践を通して学ぶ。</p> <p>● スマホなどの普及で子どもの人間関係が把握しにくい状況の中，思春期をどう付き合っているのか分からないような，そういう課題を抱え，ものすごく不安の中でみんな生活している。そこに寄り添っているいい講座だ。</p>
	<p>・くぬぎ教室。18 歳以上で知的障害の方を対象に実施。</p>		

テーマ別プレゼンまとめ

(2) 就労，子育て等の現役世代が気軽に集える公民館運営について

並木	全体意見
<p>・並木コンサート。気軽にコンサートを楽しんだり，楽器の奥深さなどを感じて音楽への興味につなげたりと，音楽に触れる機会を作ることを目的とした事業。</p> <p>●楽器を持たせたり，一緒に歌ったりするとすごく楽しんで帰られるので続けていただきたい。</p>	<p>・並木はすごくフロアが広い。国分寺高校の作品とか近所の中学校の作品のとか展示している。すばらしいなと思っている。子どもの作品を飾ると親が見に来てくれるから，そういうところでうまく使う。生かさな手はない。</p> <p>・ろくろもそうだが，畑も土をいじって子どもたちがとても喜んでくれている。ろくろの子ども教室もやっている。ただ，窯がなかなか空かない。もったいない感じがする。</p> <p>・新緑祭りでもやっているそうだが，グループでいろいろ物つくるグループがあるから，やっているところにふらっと行って，ちょっとだけ体験させてあげるとか，親子で。そういうのをいろいろなグループにどんどん奨励していくと，少し公民館に足が向かいやすくなるかもしれない。グループと連携しながら。</p> <p>・幼い子のいる親のための教室からグループ化をしてという流れが大きくなり，実際グループ化をして活動をやっている団体もあるが，その後，幼稚園や保育園に入ってしまうと，グループの継続が難しくそこで途絶えてしまうという課題があると聞いている。例えば並木では陶芸ができるとか，光ではスタジオを使えるとか，それぞれの特徴と結びつけるような活動を，教室の中で体験できるようなことがあると，そのメンバーでグループ化をしなくても，活動しているグループに参加していく流れという可能性もあるのかなと感じている。</p>
<p>・実技講座。趣味の世界を広げるきっかけを作ることを目的とした事業。「自由に楽しむ切り絵」を（全2回 託児付き）で実施。</p>	<p>・公民館側も子育て子どもをきっかけみたいな話をずっとしている。ただ，特に男性の生涯未婚率が40%とか，女性の未婚率増えている中で，子育てだけではカバーできないかなりの層がいる。その部分についてどうしたらいいかという部分も検討してもらいたい。</p>

テーマ別プレゼンまとめ

(3) すべての世代が公民館を舞台につながることのできる公民館運営について

本多	恋ヶ窪	光	もとまち
<p>・ロビーコンサート～クリスマス夕べ。本多公民館と「喫茶ほんだ」との共催事業。コンサートを実施し、障害者との交流、喫茶ほんだの周知も合わせ、市民が音楽を楽しみながら地域の人との交流や公民館への来館のきっかけづくりの機会とする。</p> <p>●喫茶ほんだで働いている障害者の方も参加して一緒に事業を行っているのはとてもいいことだ。</p>	<p>・歴史講座「国登録有形文化財となった沖本家住宅」。ふるさと文化財課との連携事業として国分寺崖線付近にある国の登録有形文化財でもある沖本家を中心に国分寺崖線と近代の別荘建築について学ぶ。</p>	<p>・ピカロック。スタジオ利用グループを中心に、日ごろのバンド練習の成果を発表し、音楽を通じた交流を深める。</p>	<p>・託児付き写真講座 撮ってうれしいスマホ写真。手軽に使えるスマートフォンのカメラで、とっておきの1枚を撮影するコツを学ぶ。講座終了後には、もとまち公民館で写真展を開催する。</p> <p>●今は写真でコミュニケーションをしようというのがトレンド。交流の材料にもなるし、国分寺のきれいな場所の写真コンテストをやるのも面白いと思う。</p>
		<p>・防災学習会。さまざまな災害に対して、事前に備えておくことや家庭や地域で安全かつ安心に対応できるよう必要な知識を学び、実践に繋がることのできるための連続講座。</p>	

テーマ別プレゼンまとめ

(3) すべての世代が公民館を舞台につながることのできる公民館運営について

並木	全体意見
<p>・並木芸術ギャラリー 一。令和2年度は約5か月を2週間ごと、令和3年度は約5か月を3週間ごとに分けてガラスケースや公民館ロビーの壁面などに展示した。</p> <p>●並木はロビーが広く、利用者に影響しないでこういうギャラリーができるので活用していくといい。</p> <p>●飾られると、出した人も、たまに公民館に来た人も、知っている人が出していると会話のチャンス、きっかけになる。</p>	<p>・人と人がつながるといって、集まってもらい集会でコミュニケーションをすとか、ワークショップをやるとか、交流のイベントとか、そういうことを思いがちだが、スマホ写真のことであったり、ギャラリーであったりということは、別に人を集めてそれで交流というのではなく、何か交流のきっかけになるものをぼんと提供とすると、公民館で会わなくてもそれをきっかけに交流していく。それもまた公民館の交流拠点としての1つの在り方なのかなと感じた。</p> <p>・1つ事業でも、いろいろなターゲットに向けた告知の方法、20代向けには託児と見せる、託児は一応あるが、それよりもインスタ映えする写真を撮って、お孫さんから「いいね」をもらいませんか、という切り口だと上の世代の方も来る。同じ講座でも違う切り口で広告を出す形で、結果的にいろいろな世代の方が集まって、共に時間を過ごせるようなやり方もあるのかなと、そういうやり方ができたら面白いのかなと思った。</p> <p>・成功事例として挙がっているものを見ると、活動そのものではなく、活動の発表の機会として外に表現を出している、それを共有すること自体が、いろいろな世代の方がつながりやすい要素があるのかなという印象を受けた。</p> <p>・公民館は部屋貸しする場所だと思っていたが、各館が工夫し事業をやっている。けやきの樹を見ると、いろいろ参加したくなる。私と同じ感覚の市民は多いと思うので、より効果的な広報ができるといいと思う。</p>
<p>・並木ギャラリー。活動の成果を披露する場が少なくなってきたことから、芸術作品に限らず公民館活動や地域のことを広く紹介できる機会を設けた。</p>	<p>・例えばオープンキャンパスのように、3か月に1回くらい公民館をPRするものやってみて、PTAの方などいろいろな方を招待し、情報発信をする。</p> <p>・5館あるということも、国分寺の面白さだと思う。ゴレンジャーではないが、各館の色、キャラクターみたいなものによって、アピールできるポイントがそれぞれあるという印象。5つをゴレンジャーみたいに見せ、そういう魅力の使い方というのは、してもいいのかなと思う。</p> <p>・ホームページの構成そのものをもっと改善しなければいけない。また、公民館という名前自体がなかなか浸透しにくいので、ニックネームをつけるのもどうか。</p> <p>・若い世代は新聞や市報をなかなか見ないので、ホームページやSNSを活用したPRが必要。</p>

『過去6年間に図書館・児童館と連携をした事例』（本多）

	連携先 (図書館 か児童館 か)	連携内容(講座 名・講座の内容, ポ スター掲示やチラシ 配布などの広報協力 等)	対象年齢・ 実際の参加 者層・保育 の有無	何方 からの 申し入 れで実 施	実施時期	実施 時間 帯	今後連 携を取 りたい 事業の 有無	連携を 取るに あたる 課題
1	図書館	新緑まつり(本のリ サイクル市)		双方	毎年5月	午後		
2	児童館	新緑まつり(異世代 交流事業)		双方	毎年5月	1日		
3	図書館 (ふるさと文化財 課)	三課連携事業(スタ ンプラリー)	小学生	三課合 意	平成29~ 31年度 (夏期休 業期間)	開館 時間		コロナ 禍のため中止
4	児童館	児童観劇会	主に小学生	双方	夏期休業 期間			コロナ 禍のため中止
5	図書館	合同防災訓練		公民館	毎年			
6	図書館 長・児童 館長	異世代交流地域協働 事業		公民館	毎年3月			
7	図書館	講座での図書の展 示・貸出		公民館	必要に応 じて			

『過去6年間に図書館・児童館と連携をした事例』（恋ヶ窪）

	連携先 (図書館 か児童館 か)	連携内容(講座 名・講座の内容, ポ スター掲示やチラシ 配布などの広報協力 等)	対象年齢・ 実際の参加 者層・保育 の有無	何方 からの 申し入 れで実 施	実施時期	実施 時間 帯	今後連 携を取 りたい 事業の 有無	連携を 取るに あたる 課題
1	図書館	基本的には公民館で 実施するすべての講 座, 催しのポスター 掲示及びチラシ配布 を依頼		公民館	市報掲載 時			
2	図書館	開催講座に関する関 連図書の展示		公民館	講座開催 前後			
3	図書館	恋ヶ窪公民館・図書 館50周年記念事業 (横断幕作成)	五・九小及 び一中の児 童生徒	公民 館・図 書館				

4	図書館	避難訓練	利用者（保育無し）	双方				
5	図書館	公民館祭					有	
6	学童保育所（恋ヶ窪公民館は児童館が近くにないため）	学童に通う児童向け講座のチラシ配布		公民館	市報掲載時			

『過去6年間に図書館・児童館と連携をした事例』（光）

	連携先 （図書館か児童館か）	連携内容 （講座名・講座の内容、ポスター掲示やチラシ配布などの広報協力等）	対象年齢・実際の参加者層・保育の有無	何方からの申し入れで実施	実施時期	実施時間帯	今後連携を取りたい事業の有無	連携を取るにあたっての課題
1	図書館と児童館	ナイトツアー（旧公民館探検）	対象：小学生・中学生（低学年以下は保護者同伴） 参加者：小学生・未就学児及びその保護者 保育は無し	三館会議にて、協議し、実行委員会方式で開催	年度 年末3頃	午後6時から午後8時	図書館とは、絵本の読み聞かせをする側の方への養成講座や朗読講座 児童館とは、絵本の読み聞かせをする側の方への養成講座や公民館を利用している団体が指導者となり、講座を開催する、例えばスポーツ吹き矢、子ども向け造り講座などが考えられる。	公民館は全年齢対象であるが、児童館の場合、児童厚生施設のため、対象が18才未満と限られる。また小中学生は平日昼間学校があるため、時間制限がある。また、図書館は基本利用者が個人利用のため、講座を開催する側と考えた場合、職員は支障無いが利用者を集う場合、困難と考える。

2	図書館と児童館	ひかり公民館まつり	対象：全年齢 参加者：全年齢 保育は無し	三館会議にて、協議し、実行委員会方式で開催	10月	10時から16時 (開会式は9時)		
---	---------	-----------	----------------------------	-----------------------	-----	----------------------	--	--

『過去6年間に図書館・児童館と連携をした事例』（もとまち）

	連携先 (図書館か児童館か)	連携内容 (講座名・講座の内容、ポスター掲示やチラシ配布などの広報協力等)	対象年齢・実際の参加者層・保育の有無	何方からの申し入れで実施	実施時期	実施時間帯	今後連携を取りたい事業の有無	連携を取るにあたっての課題
1	図書館	講座にちなんだ特集コーナーを図書館入り口に設置	-	図書館	その都度	開館時間帯		
2	図書館・児童館	ふれあいまつり・もとまち、共同開催	無	三館合意	毎年10月			
3	児童館	クリスマス会へのサンタクロース派遣	未就学児・小学生	公民館	12月			

『過去6年間に図書館・児童館と連携をした事例』（並木）

	連携先 (図書館か児童館か)	連携内容 (講座名・講座の内容、ポスター掲示やチラシ配布などの広報協力 等)	対象年齢・実際の参加者層・保育の有無	何方からの申し入れで実施	実施時期	実施時間帯	今後連携を取りたい事業の有無	連携を取るにあたっての課題
1	図書館・児童館	子どもまつり (共催)	どなたでも・保育なし	三館合意 (毎年度)	9月・11月	10時～15時	継続予定	
2	図書館	公民館まつり (共催)	どなたでも・保育なし	二館合意 (毎年度)	5月	10時～16時	継続予定	

3	図書館	避難訓練：防災講座の一部として実施。消防署職員に来てもらい、図書館を含めた建物全体での避難訓練を行う。	どなたでも・保育なし	二館合意（毎年度）	3月	10時～正午	継続予定	
4	図書館	共催：並木図書館・並木公民館 講座名：「防災講座 Dr.ナダレンジャーと一緒に自然災害を実験で解き明かそう」 内容： 納口恭明さん、罇優子さん（防災科学技術研究所）を講師に迎え、災害を引き起こす自然現象を、身近な材料を使ってミニチュアで再現するサイエンスショー形式で突風・落石・雪崩・土石流・液状化現象・地震による建物揺れのメカニズムをわかりやすく学べる講座。	どなたでも・保育なし	図書館	9月	13時半～15時半	有	
5	図書館	共催：並木図書館・並木公民館 講座名：講演会「紙芝居の世界」、地域交流事業：まちなかの環～見て創って演じて楽しんで～ 内容：絵本・紙芝居作家の「やべみつのり」さんを講師に迎え、講演会と、地域交流事業「まちなかの環」で自分たちで考えた紙芝居を作り、発表会で実際に発表する。 協力：「おはなしのくにピッピ（読み聞かせのグループ）」に、読み方・表現の仕方について学び、「ゆずの木アトリエ（真鍋さん）」に紙芝居の絵の表現や素材の工夫を学ぶ。	どなたでも・保育なし	図書館	10月～12月	15時～16時半	-	

情報発信から見た講座の成功例・失敗例

	成功例	失敗例
本多公民館	P 連との共催事業「教育講座」では P 連の連絡網を活用し広報を行ったことにより、参加増につながった。	若者支援学習会チラシを配布した際、詳しい内容を書いていないため、「思ったのと違う講座だった」という意見があった。
	地域協働事業では、町内会との連携で、回覧板や町内掲示板にチラシ・ポスターを掲示してもらった。より多くの地域の方に講座を知ってもらえた。	
恋ヶ窪公民館	国際教室事業において継続的に学校にポスター掲示及びチラシ配布を行った結果、学校のスクールソーシャルワーカーの目に留まったことにより、参加対象者の増となったと考えられる。	SNS、ホームページ、ポスター掲示、チラシ配布、掲示板掲示など行ったが、参加者が増えなかった例はあるが、それが失敗と感じることはない。
	利用者への直接の声掛けにより口コミで広がったケースもある。口コミでの広がりが出来れば成功例のひとつと感じる。	
光公民館	ピカロックの当日配信とアーカイブ配信により、多くの方に見てもらえた。	防災学習では、ツイッターなど使用し参加を促したが多くの参加者を得られなかった。
もとまち公民館	「タイの地獄寺と民主化」は Twitter で広く拡散（インプレッション数 4.1 万）し、市外を含め、多くの方に応募があった。	「もとまち上映会（パンダコパンダ）」は、作品の周知度と内容が良かったにもかかわらず、来場者が少なかった。情報発信の問題だったのか、平日昼間という日程の問題だったのかはわからない。
	「もとまち上映会（パウ・パトロール・ザ・ムービー）」は近隣の小学校低学年、保育園等にチラシを配布するとともに、自治会掲示板を借用して周知した。飛び石の祝日に実施したため想定をはるかに超える方が来場された。	
並木公民館	保育付き講座：ぶんちっち、親子ひろばなどで職員や、過去の経験者が直接説明することで参加につながった。	学習支援事業：広報内容が漠然としすぎたため何をする事業なのかが伝わらなかったのではないかとされる。

第4期 国分寺市公民館運営審議会委員名簿

◎…委員長 ○…副委員長

任期：令和3年7月1日～令和5年6月30日

根拠：国分寺市立公民館設置及び管理に関する条例（12人以内）

正 副	氏 名	略歴など	委員区分
	坂 本 真 司	市民公募委員	第1号
	新 井 満	市民公募委員	第1号
	菅 本 高 代	本多公民館利用者	第2号
	鈴 木 まき子	恋ヶ窪公民館利用者	第2号
	萩 原 勝 彦	光公民館利用者	第2号
○	田 中 英 郎	もとまち公民館利用者	第2号
	戸 澤 司	並木公民館利用者	第2号
	堀 田 直 樹	国分寺市立第三小学校長	第3号
◎	田 中 雅 文	日本女子大学名誉教授	第4号
	諏 訪 玲 子	国分寺市立小・中学校PTA連合会	第5号
	有 馬 千 佳	社会福祉法人国分寺市社会福祉協議会	第6号
	笹 井 宏 益	玉川大学学術研究所特任教授	第7号

国分寺市立公民館設置及び管理に関する条例第8条 第1号＝公募により選出された市民，第2号＝公民館利用者，第3号＝学校教育の関係者，第4号＝社会教育の関係者，第5号＝家庭教育の向上に資する活動を行う者，第6号＝社会福祉関係団体の代表者，第7号＝学識経験のある者

備考 令和3年7月1日から令和4年3月31日まで牛田純一委員が社会福祉関係団体の代表者として委嘱されていたが退任し，令和4年4月1日から有馬千佳委員が委嘱された。

